

## 第18回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 津田 真一

国際仏教学大学院大学大学教授

第18回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員長 前田専學（東方研究会理事長）

2008年10月10日インド大使館

津田真一博士は、昭和十三年のお生まれで、昭和三十七年四月に東京大学大学院人文科学研究科修士課程にご入学、それ以来、インド密教の研究に焦点を合わせてこられました。

津田博士のご研究の第一歩は、「ブッダグヒャの諸注釈にもとづく『大日経』「住心品」の研究」という修士論文から始まります。従来の『大日経』研究が、漢文文献によるものであったのに対して、津田博士の論文は、西藏訳の本経を八世紀のインド人学者ブッダグフヤによる未再治・再治二本の『広釈』と、同『略釈』にもとづいて内容的に解明しようとしたものであります。津田博士の研究の独創性の萌芽は、すでにこの修士論文の中に見られます。

昭和三十九年、同大学院博士課程に進まれた津田博士は、その研究目標を『大日経』からインド後期密教であるタントラ仏教の研究に定められました。しかし当時、タントラ仏教の研究は、世界においても、まだほんの緒についたばかりの状態にありました。そこで原實東大教授のご尽力によって昭和四十二年オーストラリア国立大学に留学され、J・W・de Jong 教授の下で、さらに研究を進められることになりました。

津田氏は同大学における研究テーマとして、タントラ仏教の中心的な体系である般若・母タントラに属する一文献である *Samvarodaya-tantra* (『最勝樂出現タントラ』) を選ばれました。その研究に当たって、東大図書館所蔵の良好な五本の写本の他、他の図書館所蔵の三本の写本を加えて合計八本の写本にもとづいて、同テキストの校訂と内容の解明に努め、Ph.D.論文を完成されました。それが *The Samvarodaya-tantra Selected Chapters* (一九七〇) であり、一九七一年にオーストラリア国立大学から Ph.D. を取得されました。

津田氏のこの Ph.D. 論文は、一九七四年に東京の北星堂から出版されましたが、津田氏のこの方法論に注目されたのが、中村元先生でした。先生は雑誌『現代思

想』(青土社、一九八九年一月号)の中で、「津田氏がこの校訂本を作成した方法論的意義には、まったく独自のものがある」として、その独創性を絶賛しその学的意義を強調しておられます。

なお、津田氏のこの方法論は辻直四郎博士によっても是認せられ、辻博士の指示によって、高崎直道博士が『鈴木学術財団年報』(第一号、一九七四年)に詳細に紹介されました。

さて、帰国後の津田氏は、タントラ仏教の研究を継続する一方、氏の研究の出発点であった『大日経』を、そのもとに遡って『華嚴経』に関心をお向けになりました。そして、この方で、決定的な一歩が印されたのは、一九七六年、玉城康四郎博士から「dhamma の根源態」という言葉を教示されたことでありました。津田博士は玉城博士のこの概念を検討し、それを〈中性単数の dharma の豎横両極構造〉という津田博士独特の術語で捉え直されました。さらに種々の独特の新しい術語を駆使した、津田氏のインド密教思想史の新構想を提示されました。それは〈ゴータマ・ブッダの宗教〉から始まり、大乘としての『華嚴経』、大乘から密教への critical な転換点としての『大日経』、純然たる密教としての『金剛頂経』、それが発展してタントラ仏教のピークを現出した『ヘーヴァジュラ・タントラ』、そしてその『ヘーヴァジュラ・タントラ』の密教的行法が自己否定したところから、またまた critical に展開して〈反密教〉として密教の完成態を示すサンヴァラ系密教に至る、全インド仏教を縦貫する仏教史の構想であります。

この研究は、『サンヴァラ系密教に至るインド密教思想史の展開とその諸原理』という文学博士学位請求論文として結実いたしました。この博士論文は、昭和六十年に東京大学文学部に提出受理され、翌年津田博士に、文学博士号が授与されました。

この論文の提出以後においても、津田博士は、思想史の原理に関する研究を継続され、昭和六十四年に、『ヘーヴァジュラ・タントラ』の末尾にある pitā te tvam asi svayam (汝は本来自ずから汝の父なのである) という密教の最終的な真理命題を、「しかも汝はみずから、自力によって (svayam) 汝の父になるべきである」という命令法として理解されました。

さらに、津田博士はこのサンヴァラ系密教における救済の構想が、専修念仏すればその臨終正念に極楽国から弥陀の来迎がある、という日本浄土教系統の、救済の構図に全面的に一致している、という事実気づかれました。この気づきによって、仏教学が神の存在を言いうる唯一の根拠を用意するものであることを自ら認識されました。事実、それ以後、津田氏の思考は仏教という狭い枠から自由となり、他の諸体系、殊にキリスト教をその視野に収めるようになりました。そ

の種の業績として、①「グノーシスと密教」『グノーシス異端と近代』岩波書店、二〇〇一年一月所収、②「終末論的実存の弁証法」と自然法爾——行の必然的問題から見た K・バルトと親鸞」『比較思想研究』（第二八号、二〇〇一）という二つの論文を挙げる事が出来ます。

また、津田氏は近年にわかにその研究の方向を『法華経』に転じ、すでにくつかの大きな論攷を発表し、その中で独自の『法華経』理解を示しておられます。

以上、津田博士のおよそ五十年に及ぶご研究の歩みを辿って参りました。津田博士のご研究の独創性と学のご功績に関しましては、中村元先生ご自身ご生前中にお認めになっていたという事実は、すでに申し上げたとおりであります。さらに、津田博士は、まだほとんど未開拓といってよいインド後期密教研究に精力的に取り組まれ、新生面を切り開かれたご貢献は、中村先生のお名前のついた中村元東方学術賞に相応しいと判断致し、今年度の授賞者と決定した次第であります。